

令和元年度

事業所名： グループホーム まぶる

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0373000744		
法人名	有限会社 ヘルパーはうす		
事業所名	グループホーム まぶる		
所在地	〒028-1311 岩手県下閉伊郡山田町大沢4-38-5		
自己評価作成日	令和元年10月3日	評価結果市町村受理日	令和元年11月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

年間行事、活動に力を入れ、地域・他事業所との交流を図り入所者の思いをくみ取り、一人一人に合わせた支援を行っている。
---

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kajikensaku.mhw.go.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_022_kan:true&amp;JiyosyoCd=0373000744-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">http://www.kajikensaku.mhw.go.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_022_kan:true&amp;JiyosyoCd=0373000744-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームは東日本大震災津波の被災を受け、平成25年8月から現在地に移転再建されて6年目を迎えている。法人として、当ホームの他に敷地内で訪問介護と居宅介護支援、介護タクシー事業にも取り組み、訪問介護事業所には「地域交流スペース」を設け地域に開放しており、高齢者の方々が集う拠点となっているなど、地域との交流を積極的に行っている。利用者ケアの充実にも注力しており、今年からは身体拘束に関する職員の自己チェックの取組みを始め、職員自身の気づきと改善を進めたり、家族アンケートの実施によって、家族の希望や要望を把握する取組みを進めるなど、先進的な姿勢は高く評価できる。職員は全員が参加して作成したホームの理念である「笑いあって、今をまぶります」を、日々のケアの中で実践し、努力を重ねている。
---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和元年10月23日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

令和元年度

事業所名：グループホーム まぶる

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝理念を唱和し、職員の意思統一を図っている。入所者の希望を最優先し、自分らしくいられる様にケアに努め、笑って暮らせるように支援している。	ホームの運営理念を「笑いあって今をまぶります」としており、2年前に職員全員が参加して話し合い改訂したものである。この理念を職員が毎朝唱和し、ホールにも掲示している。日々のケアにおいて笑って接することで、利用者の笑顔と希望を叶えるよう実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	保育園・小学校の運動会、老人クラブの慰問等、地域の方々から声をかけて頂き交流している。月一回行われる地域の集まり(水仙の会)にも呼んでもらい、物作りや料理も行っている。	地元の保育園や小学校の運動会に招待され出かけるほか、中学生が職場体験や福祉体験で来訪している。地域のお祭りでは踊りの団体が訪れてくれる。隣接する法人の交流スペースは地域の趣味活動の場となっており、利用者も参加して楽しんでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所での実践を地域で行われる研修に参加し報告したり、施設見学にも伝えている。実習生等の受け入れも、積極的に行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回運営推進会議を開催し、施設の現状を広報用いて報告し、他者から質問・要望を受けながら話し合い、サービス向上に努めている。	地域からは民生委員や地区長が参加しており、利用者の状況や行事の説明等を話題とするほか、消防署員からの蘇生法の研修なども行っている。委員からは非常口の段差についての意見があり、スロープとなる板敷を設置するなどの改善が行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議を始め、町・内外で行われる会議に参加し、相談や情報交換を行い連携を密にしている。	運営推進会議に町の地域包括支援センター職員が参加しており利用者の状況を把握していただいている。役場の担当課とは電話の他、こちらから出向いたりして連携している。町主催の地域ケア会議に参加するほか、特に防災関連の会議にも参加し、連携を深めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会を設けており、会議で報告、勉強会を実施し、共通認識を持ち、拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束適正化委員会は運営推進会議と併せて開催している。ベッドセンサーの使用はなく、玄関の施錠は夜間のみとなっている。また、今年から身体拘束に関する自己点検の取り組みを始めており、集計結果について職員間で話し合い、お互いの気づきに繋げている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	勉強会を行い、日々のケアの見直しをし、入所者と信頼関係が築けるように言葉遣いに注意している。対話時、言葉遣いが乱れる時には職員間で注意している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は研修に参加し、制度について学んでいる。他職員も参加し学ぶ機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族の不安や疑問点に対して話し合いをし、必要書類の説明を行った上で、納得を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入所者には、日々の会話の中で意見や要望を聞き取りしている。家族は面会時・電話連絡・ケアプラン見直し時など、意見・要望を確認している。出された意見は申し送りやミーティングで伝え、ケアに反映させている。	多くの利用者が自分で意思表示できるが、できない方は表情等から読み取っている。家族には広報誌を2か月毎に郵送して利用者の状況を伝え、来訪時に意見や要望を伺っている。また、年1回は家族アンケートを行い、身体状況の悪化等の相談も受けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	朝の申し送りやミーティング時に職員の意見交換を行い、業務の見直しを行っている。又個々に相談や意見を聞きに行く等、管理者がいつでも聞く体制が出来ている。	毎月の職員会議において職員から意見が出されており、除雪機械の購入などの提案がある。また、昨年度は職員アンケートを実施して、希望者には代表者との個人面談を行っている。	職員は代表者や管理者とは日常的に相談できる環境にはあるが、個人面談についても、より一層重視して取り組み、プライベートな事柄も話題とするなど、さらに管理者側と職員との風通しの良い職場環境となるよう期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	日々の会話や身体面にも目を配り、職員間でのトラブルが起きない様に、働きやすい環境作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	県主催の研修に参加したり、定期的に勉強会を行い、職員が問題視するものを取り上げ、より良い介護を提供出来る様に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	町内の研修・交流会・会議等を通じて意見交換を行い、当施設の質の向上へ繋げられる様に取り組んでいる。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	会話を多く持ち、本人の思いを傾聴し、安心・信頼が得られる関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人・家族の不安や要望を聞き取り、少しでも不安を取り除ける様、面会等を通じて関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の心身の状況・意向に応じ、家族の要望も視野に入れたサービス対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入所者の得意分野を活かし、作業等役割を構築し、職員も一緒に行う事で対等な立場で行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と面会や通院等で、連絡は常に密にし、本人の状況・意向を伝え、共に支え合う関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の行事には、その地域出身の入所者を参加させたり、行きつけの美容院を使ったり、昔ながらの繋がりを大切にしている。	町内各地域のお祭りには、出身地区の利用者が見物に出かけるなど、馴染みの場を大切にしている。お盆や正月に帰宅する利用者も多く、宿泊する方もいる。馴染みの美容室に出かける方がいる他、ホームには理美容業者が来訪し、馴染みともなっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入所者同士の関係に配慮しながら、座席順も考え対応している。意志伝達が上手に出来ない方には、職員が間に入り、コミュニケーションが図れる様に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族がいつでも相談しやすい環境を作り、日常的な会話等、話してほっと出来る関係を築いている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	定期的なモニタリングの実施によりプランを作成しているが、その過程で本人の思い、意向等聞き取りし、更に日々生活の行動や言動、表情等の観察を実施する事で把握に努めている。	多くの利用者が意思表示でき、言葉で意向や希望を確認できている。言葉による表示が困難な方は、表情や仕草から思いの把握に努め、例えば、うつむき加減の利用者の様子から帰宅願望について読み取るなどしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日々何気ない会話、家族からの情報収集を必要に応じて実施している。また入居契約時点での提出書類(入居にあたっての身上書)により生活歴の情報を共有できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日勤者から夜勤者、夜勤者から日勤者への申し送りを実施する事で、その日一日の様子や夜間帯での状態、対処方法(皮膚変化や咽に対する)を共有している。特に医療的な情報は情報連絡ノートを活用して心身状態の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回のケアカンファレンス、定期的なモニタリングを実施する事で本人の思い、介護職の思いや情報、家族の考え等考慮し、今後予測される様々な状態の変化にも留意しプラン作成している。	担当職員の気づきや介護記録をもとにカンファレンスが行われ、3か月毎にモニタリング、6か月毎にプランの見直しが行われている。家族の意向は面会で来訪された際に伺っており、潔癖症や他の利用者との関係を気遣う家族の意向をプランに反映したりしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々のケースファイルを用意し昼夜の様子、通院情報を記入している。特に重要事項は各職員に確実に伝達されるよう情報連絡ノートを活用し把握されている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	地域の方から、誰でも利用できる地域交流スペースがあり、町内で活動しているサークル等、様々な方が使用している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	病院・理美容等、馴染みのお店を使ったり、人等を把握し、施設外といつでも接点を持つ様に支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族の希望する医療機関を継続し、施設側が家族に通院前の状態を報告し、家族からの要望を聞き、受診介助している。受診後、家族にも報告している。	利用者全員が入居前からのかかりつけ医となっており、町内の個人医院を5人が受診し、他は山田病院と宮古市内の受診となっている。町内の受診には職員が付き添い、町外は家族の対応をお願いしている。訪問診療は以前はあったが、今は行われていない。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設には看護師はおらず、日々ケアをしている介護職が早期異常に気づきかかりつけの病院を受診している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入退所時には、施設での情報等、書類での情報交換を行っている。病院・家族・施設の事情を踏まえた上で話し合い、治療を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時、終末期に対する意向を伺っているが、急変時や入退院後に入る施設を申し込む様に促し、家族の負担にならない様に早めに相談、他事業所とも連携を図っている。	入居時に重度化や看取りについて家族に説明している。今まで4人の看取りの経験があるが、現在は訪問診療や看取りの協力医体制が無いことから、食べられない状態までの支援となっている。家族へは、医療機関に入院した際には、特養などの他施設への申込みの支援等を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防の協力の元、定期的に心肺蘇生法と応急手当の訓練を受けている。マニュアルを作成し、急変時・事故発生時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防指導の元、昼夜間想定訓練や院内での火災・土砂災害等の訓練を行い、職員の意識を高めている。地域住民にも声をかけ参加促し、協力体制を築いている。	2か月に1回は、火災や水害などの様々な想定訓練を実施している。町のハザードマップでは危険地域の指定とはなっていないが、沢沿いにあるため大雨の際には特に裏山を注意して観察している。また、台風等の場合は、予め夜間2人体制として避難に備えている。	様々な事態を想定して避難訓練を繰り返しており高く評価できる。沢沿いの立地でもあるため、より一層の訓練を重ねられ、職員が適切に対応できるよう成果を期待したい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	慣れもあり、方言を交えて会話しているが、会話が弾み言葉が乱れてしまうことがある。入所者一人一人を尊重し、職員間で注意し合い、プライバシー保護に努めている。	トイレ誘導の際は、「点検しに」などと周囲に配慮した声掛けを行っている。携帯電話の利用者には、使用時に居室に誘導する配慮を行っている。また、利用者を「ちゃん」付けて呼ばないように注意したり、居室への出入りには声掛けとノックを行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活での表情・行動観察と共に何気ない会話の中から、本人の意向をくみ取り、自己決定出来る様に働きかけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の状態や思いに配慮しながら、その時の本人の気持ちを尊重し、安心して過ごせる様に支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎日の整容に加え、外出に合わせた服装が出来る様に支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入所者と共に、食事の準備・片付けを行っている。旬の物も取り入れ、嗜好にも注意し献立も一緒に考え、食欲が出る様に支援している。	昼食は職員が調理し、朝と夕食は調理済の主食を提供している。献立には利用者の希望も伺っている。利用者は食材の買い出しや皮むき、盛り付け、片付け等を手伝っている。また、誕生日には希望の食事を提供したり、ドライブに出かけて、道の駅などでのお食を楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分摂取量には気を付け、一日摂取量は細めにも摂取促し確保している。状態に合わせた食事形態も工夫し対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々に合わせた口腔ケア行い、食物残渣で口腔内が不衛生にならない様に注意している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々にあった排泄パターンを知り、早めの声掛け促しにて、失敗しない様にしている。意思疎通が困難な方には、一回の排泄量を確認し、状況により次の排泄介助の時間を工夫している。	現在はオムツ使用が2人、リハビリパンツ使用が5人、布パンツ使用で自立が2人となっており、夜間に3人の利用者がポータブルトイレを使用している。排泄量や時間をチェック表で確認し、利用者の様子も見ながら適切なトイレ誘導を心掛け、トイレで排泄できる支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量に気を付け、毎朝牛乳・ヨーグルトを提供したり、野菜を多くメニューに取り入れ、便秘予防に取り組んでいる。又 毎日体操行い、体を動かす機会を持っている。		

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人一人に合った入浴方法で、入浴介助している。二日・三日おきに入浴できるように予定を立てている。行事等、外出により入浴時間が変更になってしまうこともある。	毎日お風呂を準備し、週2～3回の入浴となっている。複数の職員での入浴介助が3人となっている。全員が女性利用者であり同性介助としている。入浴拒否の方はおらず、職員は利用者の話を傾聴する良い機会ととらえて、会話も大切にしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室・ホールと、状況に応じ自由に行き来出来るようにしている。入所者が安心して休めるように静かな環境・室温等にも注意している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員一人一人が入所者の服薬を把握し、個々のファイルに処方箋の紙を綴じ、いつでも確認出来る様にしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の食事準備・片付け・軽作業等の役割を持ち、装飾作り・裁縫も行い気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気候が安定した際には、買い物やドライブに出掛ける機会を設け、家族の方にも協力して頂き一緒に外出できる支援をしている。	天気の良い日には敷地内や周辺の散歩を楽しんでいる。夏場には玄関先のベンチで水分補給とともに外気浴を行っている。地元のお祭りや食材の買い出しに出かけるほか、お花見やつつじ見物など、利用者の希望に沿った外出を心掛けている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入所者の中でお金を所持している方がいるが、施設・家族も了承している。本人が買いたい物がある時には購入し、残りのお金も一緒に確認している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	いつでも電話可能としている。遠方の家族や知人に連絡したりと携帯電話使用している方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室温や湿度をチェックし配慮、又照明等本人に合った安心出来る空間作りをしている。季節ごとの作品や、家族からのプレゼントされた花等を飾ったり工夫している。	ホール天井にエアコンが設置され、快適な温度調節がされている。床には衝撃を和らげるクッション材が使われている。大型テレビの前に椅子式の炬燵があり寛げる場となっている。壁面には利用者も作成した干支の作品や絵も飾られ温かい雰囲気となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブル席・ソファ席と自由に座れる様に対応している。入所者同士、折り合いが合わない方々もおり、トラブルにならない様に対応している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の使い慣れた物や家族写真を置いたり、本人の制作の飾り等で居室の空間を彩っている。家族の写真を眺め喜んでいる方もいる。	ベッドや箆笥、クローゼットが備付けられており、エアコンと湿温度計で快適な室内環境となっている。利用者は時計やテレビ、ラジオ、家族写真などを持ち込み、簡素ながらもそれぞれにとって寛げる空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室入口等、わかりやすい様に表示している。廊下等照明に気を付け安全に生活している。		